

## 保育の現場から



# カマキリとの出会い

和島千佳子

子どもたちとともに生活していると、自然物やその変化との出会いは非常に魅力があり、神秘的で、子どもの心を大きく揺り動かすものだということを強く感じます。また、幼児が心を寄せたものを家庭から園に持ち込んでくることもしばしばあります。昨年度、五歳児クラスで、一人の幼児がカマキリの

卵（卵囊）を持ってきたことから始まった一連の出来事について考えてみたいと思います。

### 卵との出会い

五月の連休明けに、A児が家からカマキリの卵を持ってきました。出かけた先でお父さんが見つけて



家に持ち帰ったものを、A児はクラスのみんなに見せたいと園に持ってきたのです。さっそく飼育ケースに入れて保育室に置いておくことにしました。

「これ何？」と興味を示す子どもたちに、今後の見通しや期待をもてるとよいと思い、『162ひきのカマキリたち』（得田之久さく、かがくのとも、福音館書店）という絵本を読み聞かせました。春に卵から生まれた百六十二匹のカマキリたちが成長の過程でどんどん減り、大きく育つたのはメス一匹のみ、そこにオスが飛んできて結婚し、しばらくしてメスは卵を産む、というあらすじのお話を、子どもたちは関心をもって聞いていました。

### カマキリ誕生、 庭に放す

しばらく変化の見られない卵でしたが、六月上旬のある朝、小さなカマキリが次々と出てきているの

をクラスの一人が発見し、すぐにみんなにその話が広まりました。朝から眠そうにして顔を伏せていたある子などは、その知らせを聞いて飛び起き、駆けつけたほどでした。

A児は数人の友達と一緒に、他クラスなど園中に生まれたてのカマキリを見せに出かけました。A児たちは、小さいクラスの友達や保育者に、A児が持ってきた卵から生まれたのだと興奮気味に話しながら全クラスを回り、職員室にも知らせに行きました。

一方、B児たちは「飼いたい、エサは何だろう」と図鑑で調べ、バッタを食べることを知り、驚いています。しかし、カマキリは生きたエサしか食べないので飼うのは難しいということも知り、どうしようかと考えている様子です。

そこへ、A児たちが保育室に戻ってきました。そしてほかの保育者から、庭のあちこちに少しずつ放しておくとなんか大きくなってまた会える、と聞いてきた

というのです。そこで、庭の茂みに数か所に分け、小さなカマキリたちを放すことにしました。

「元気でね」「また会おうね」「Aちゃんのこと忘れないでね」「Aちゃんのお父さんのこと忘れないでね」とカマキリに声をかけながら、カマキリたちの姿が見えなくなるまで子どもたちは見送ります。A児やA児のお父さんに思いをはせながらカマキリを見送る子どもたちの感性にはつとさせられました。そして、子どもたちに「先生、あのカマキリの本また読んで」と言われ、再度クラスで『162ひきのカマキリたち』を読みました。すると今回は、実際にカマキリの誕生を目の当たりにしているだけあつて、食い入るように絵本を見、よく聞いていました。それからしばらくの間は、「逃がしたカマキリはどうしたのかな」と言う声が聞かれましたが、なかなか出合えず、しだいにカマキリの話は少なくなっていました。

大きくなった

カマキリとの再会

夏の終わりのある日、園庭から「カマキリ！ カマキリがいたよ！」「早く！ 逃げちゃうよ！」と元気な声が聞こえてきました。

夏野菜を植えたプランターの周りに大勢の子どもが集まり、ちよつとした人だかりができています。大きなカマキリは素手で捕まえるには手ごわい相手だったようで、飼育ケースに追い込んで捕まえようと考え「こっちこっち」などと声をかけ合っています。しばらくして捕まえるのに成功すると、「やったー！」「カマキリ捕まえた！」とみんな大喜びで、「ぞう組のカマキリだ！」と言っています。

その様子にも私も六月のことを思い、「Aちゃんのカマキリかもしれないね」と言うと、子どもたちは「これAちゃんのカマキリ！」と前に逃がしたこととつ

ながり、さらに大喜びです。庭のあちこちに逃がしたことを思い出し、それぞれの場所を探しに行く子どももいます。

凶鑑を持ってきて捕まえたカマキリと見比べる男児たちは、オスだといいなと思っているようで、「とぶからオス」「しかも足が長い」など、自分なりに思ったことや考えたことを言葉に表し、友達と伝え合う姿が見られます。また、やはり飼いたいという思いからエサのバッタが必要だと考え、先日の散歩で見つけたバッタを逃がさなければよかったと話し、園庭にもバッタがいるかもしれない、と探し始める子どもたちもいます。

私もカマキリを間近で見ると、立派なカマやユートモラスな三角形の顔、ギラリと光る眼に思わず見入ってしまいます。強いものへの憧れなどの気持ちでしょうが、とくに男児がうれしそうに誇らしそうに、そしてちよっぴり怖そうに見ている気持ちもわかる



気がします。私が「本当に顔が三角だね。茶色い眼だね」と言うと、C児が「え？ 茶色？」とすかさずカマキリをのぞき込みます。「ほんとだ、何で？」

さっきは緑だったのに」としきりに考えています。さすが、捕まえるところからずっとカマキリをよく見ていたC児ならではの眼の色の変化の発見です。

飼うのは難しいとわかっていながらも、そばに置いておきたくてしばらくの間飼育ケースに入れていたカマキリですが、昼食前に「そろそろ逃がそうよ」と声をかけると、多くの幼児はしぶしぶ納得する中、嫌だと言いつ張るのは捕まえた張本人のD児です。私が「そう組もお昼ごはんだよ。カマキリもエサをとりたくないじゃない？ 逃がしてあげようよ」と話すと、D児はしばらく考えて「そうだね、そしてまたまたとんでいってメスと結婚してまたメスが卵産むもんね」と、絵本のことを思い出してなのか納得したようでした。

### 体験と体験がつながって 友達同士がつながって

卵からカマキリが生まれ園庭に放したこと、散歩でバッタを見つけたが逃がしたこと、大きく育ったカマキリに再び出合ったこと、などの過去と現在のそれぞれの印象的な体験が、子どもたちの中で一連の流れをもつてつながりました。さらに、絵本などからの情報も含め、カマキリを逃がすとまた結婚し卵が産まれるだろうという未来の予測もしています。それは、食物連鎖や生命の連続性といった、非常に本質的なことにかかわる大切な気づきであると思います。

子どもたちは、自分の体験や友達とのかかわりを通して感じ考える中で、自分なりの認識をしたり知識を得たりしています。そして、それらを友達や保育者と言葉で伝え合いながら、また新たな認識を深

めているのだと思います。同じ出来事に出合う中でも、それぞれの子どもたちはさまざまな感じ方をしているようです。そのような子ども同士がともに生活しながら、おもしろさや楽しさを共有し、互いの気づきや感じ方に影響を受け合って、一人ひとりの体験の幅が広がると同時に、友達同士のつながりも深まっていることを感じました。

私はこの一連の出来事から、心を揺り動かされる体験の重要性とともに、体験と体験とがつながることにより一つ一つの体験のもつ意味が深まることを学びました。私自身も、いったいいつ生まれるのだろうかと毎日飼育ケースをのぞき込み（とくに週末の帰りや休み明けの朝は心配しました）、どんどん出てくる赤ちゃんカマキリの数や動きに圧倒され、生まれたての白く小さなカマキリが、みるみるうちにしっかりした硬そうな色の体に変化する様子に感動するなど、たくさんの体験をしました。

「すごい！」「おもしろそう！」「なぜ？」「どうなっているのかな？」など、自分自身の心が動かされ周囲の物事にかかわろうとすることが日々の生活の中での喜びや楽しみであり、学びの原動力になることは、保育者も子どもも同じなのだと思います。意図や計画をもちながら、ハプニングも大切に受け止めて、子どもたちとともに日々の生活をつなげ、少しずつ「新しい今」を創り出していくおもしろさを実感しています。

その後、九月いっぱいには園庭で何度かカマキリに出合うことができました。昨秋に卵は見つけることができませんでした。どこか園庭の隅に産卵していて、またこの夏、あのカマキリの子どもたちに会えるといいな、と思いつながら過ごす毎日です。

（足立区立おおやた幼保園教諭）